観自在

弘長寺寺報
第3号
平成一四年
一月

道元禅師様 至宝の教え

《仏法には修証これ一等なり》

弘長寺副住職　森田裕光

おめでとうございます。本年六月の大遠忌本山団体参拝は、観自在第2号でお知らせした通り、昨年六月二十五日で締め切らせていただきました。その結果、副住職夫婦を含め十三名の方の参加となり、お檀家皆様の代表として、参拝修行してまいります。

大遠忌は五十年に一度の勝縁…そこで道元禅師様の教えの特徴を、簡単にご説明致しましょう。

それは「仏法には修証これ一等なり」という言葉に尽きると思います。修行と悟りは同じだという意味です。

一般的には、お釈迦様が苦行の後に悟りを得られて仏となられたように、悟りを得るために修行があると考えがちです。

しかし、悟りが最終目的…（悟れば仏になることができて救われる）ということであれば、絶対に悟れそうもない私などは永久に仏になれず、救われないことになります。

そうではなく「修行することが悟りであり仏なのだ…言い換えれば修行こそが最終目的であり、悟りなど考えなくともよい。」と説いて下さったのです。

（結果よければすべて良し）という考え方とは正反対です。

結果に至る過程こそ重要なのだ、ということでしょう。

仏様のお悟りに包まれながら修行をさせていただくのだから、修行しているそのままが悟りの世界であり仏の姿なのだよ、とおっしゃって下さいます。

おかげで、悟りという言葉に振り回されず、安心して修行そのものに打ち込むことができます。

そういえばお釈迦様もお悟りを開いて後、お亡くなりになるまで四十五年間も説法修行の旅を続けられ、今でも仏の世界でご修行中とのことですから、修行が最終目的であり、又修行には終わりがない、というのもなるほど納得です。

修行と悟りは同じ…当時の仏教思想のパラドックス（逆転の発想）をうちたてられました。

なみだをこらえて
悲しみに　たえるとき
ぐちをいわずに
くるしみにたえるとき
いいわけをしないで
だまって
批判にたえるとき
怒りをおさえて
屈辱にたえるとき
あなたの眼のいろが
ふかくなり
命の根が
ふかくなる

相田みつを

今　この道我が人生大切に歩みましょう

弘長寺護持会
会長　土江嘉久

紀元は二千二年。幕は明けました。

今その新春にのぞみ老いも若きも人生それぞれの道程を歩まれています。高年齢の方々は身をもって経験されたことですが五十有余年前第二次世界大戦直後のことです。敗戦の結末は幾多有能な人材を失い家を焼かれ生命の根源である食べ物さえも得ることができず栄養失調から餓死者も出る時代でした。この状況からはとても将来日本は立ち直らないとみられていました。

そのような苦境と混乱を極めた時代でしたが人々はよく耐えて打ちひしがれることはなく「新日本建設」に向かって着実に歩を進めました。

そして昭和二十六年講和条約締結後昭和三十年代になりますと戦前以上の復興をなし諸外国からも「廃墟から成長の日本」として高く評価されました。

この成長はさらに続き遂に経済大国になったのです。米国に次ぐ世界第二位のこれはまさに当時を生きてこられた方々の歴史にのこる偉大な成果であります。

今平成の時代。バブル崩壊からこの方経済は不況倒産も相次ぎ仕事の場を失う人もあり不景気は深刻な様相を呈してきました。

加えて海外では米国における同時多発テロの勃発以来不穏な情勢を払拭できません。我が国の内も外も難しい問題をかかえるいまの世にまたまた私たちは御仏により“生かされている”のであります。

避けて通れない我が人生です。

今歩むこの道は、先行き平坦なのか坂道なのか　もっと厳しい茨（いばら）の道となるのか予測はできません。

でも途上出会う様々な問題は　過去敗戦後激動あっても　見事に歩んだ先の混乱期を　必ず克服の足跡から学べば　さらに大きな幸せの到来を信じます。

人生に二度はなし。大切に歩みましょう。

合掌

お願い

●法要について

▽当山では、翌年のご法事は原則としてお断りをしております。

ただし、ご事情によって、どうしても当年（今年）のご法事と一緒に修したいという方には、「翌年の当たり年に必ずお寺参りをする、そしてその時にお塔婆を書く」という条件付きで承っております。

▽ご法事のお申し込みは前年よりお受けいたしておりますが、お寺の突発的な事情でやむを得ず変更していただかなくてはならないことが生じる場合があります。

その時に、どうしても変更ができない場合は、別の方丈様にご法事をお願いをすることもございますので、ご了承下さいますようお願いいたします。

●葬儀について

▽一般的には出棺をしてから本葬という形が多いのですが、出棺と本葬を同時に行うという方法もございますので、ご検討下さい。

▽葬儀の僧侶は二人以上でお申し込み下さい。

例えば僧侶三人なら導師一人・役僧二人（通称一仏三人）となります。

仏というのは仏事師、つまり導師のこと。

僧侶四人なら導師一人・脇導師一人・役僧二人（通称二仏四人）。

僧侶五人なら導師一人・脇導師二人・役僧二人（通称三仏五人）。

●托鉢行について

▽月に一度、托鉢行を始めました。

門付けで、家の中には入りません。

私自身の修行が目的です。

浄財は七割を位牌堂建設基金へ、三割をボランティアへ寄付致します。

お知らせ

●無縁墓合祀致します。

▽お寺が管理している無縁墓が多数あり、整理・合祀して、新たに無縁塔を建てることに致しました。

美観を損なう山門前の墓地焼却炉も移転し、三界万霊塔や、地蔵石像も配置を変え、無縁塔と並べて安置することに致しました。

つきましては、各お檀家様の墓地に無縁墓等がございましたら、お寺の無縁塔に合祀致しますのでお申し出下さい。

トラブルを避ける為、いつでも所有者に返還出来るよう、お寺の無縁塔には別々の入れ物に　それぞれの墓地の無縁墓の地名・名前を書き、霊骨は別々に納骨致します。

●涅槃図衝立をご喜捨いただきました。

▽日本の釈迦涅槃図は動物達が泣いている姿も描かれていますが、この図は恐らく中国製で、十代弟子のみを描き、より現実的な構図になっています。

貝の素材貼り付け等が施され、幻想的で有り難い図です。

二月一五日二時、涅槃会法要を厳修致しますのでどうぞお参り下さいませ。

施主　岡山市　高田安子　殿

無常甚深微妙法（むじょうじんじんみみょうほう）
百千萬劫難遭遇（ひゃくせんまんごうなんそうぐう）

（仏法に出会える確率は、気の遠くなるような確率だ）

昨年の最大の衝撃は、何といっても米国テロ事件です。どんな理由があろうとも無差別大量殺人の権利は誰にもないはずです。

しかもその背景には宗教思想が見え隠れしていることに愕然と致します。

自他の幸せを願い、自他の命を護ろうとするのが崇高な宗教でありましょう。

そう考えますと、私どもは戒律の最初に不殺生戒（生あるものの命を奪うな）が説かれている尊い仏法に出会えた事に感謝すべきだと思います。

仏法に出会える確率は、気の遠くなるような確率だとお経に説かれています。

確かにそうです。

地球上の生物は数千万種類あるとのこと、その中でたった一つ人間に生まれ出ることが出来て、しかもあまたある宗教の中で仏教に出会うということは、砂漠で一粒の砂を探すたとえそのままだと思います。

宗教には一神教と多神教があります。

イスラム教やキリスト教のような一神教は、どうしても排他的になりがちで争いが多い。

そこへいくと仏教は様々な仏様がおられ、どの仏様を拝んでも大丈夫。

特に日本人は神社もお参りすれば、法事もする、クリスマスだって祝ってしまう。

そのいい加減さが、実は敵を作らないという平和維持に役立っていると思うのです。

そのいい加減というのは「どうでもいい加減」ではなく、「ちょうどいい加減」なのです。

そのいい加減さに寛大な仏法に今出会えたことを共に喜びましょう。

方丈様の近況

昨年お彼岸前に転倒し、脳内出血により緊急手術をされました。

一時は肺炎を併発、高熱が続き、食事も点滴のみという危険な状態を脱し、無事退院。

お正月も山内で過ごされ、現在はデイサービスやショートステイを利用しながら在宅介護を致しております。

歩行は全く不可能になりましたが、食事は自分で食べられますし、大変お元気です。

梅花講

弘長寺寺族　森田久美子

新年おめでとうございます。

夢を託した二十一世紀は平和の願いをうち砕く大変な幕開けとなりました。

しかし、「朝の来ない夜はない」という言葉を信じて前進あるのみ、と思うこの頃です。

「詠讃歌共に唱えて十五年」、早いもので開講来十五年目を迎えました。

発足当時に比べますと、高齢者が多くなり人数は減少し、いかにして現状を維持するか、という難しい時期に入りました。

一人でも仲間が増えることを期待しています。

さて本年は道元禅師様七百五十回大遠忌奉讃、並びに梅花流創立五十周年記念大会が日本武道館にて開催されますが、当山からも八名参加の予定です。

今年も又同行同修の皆様との出会いを楽しみに精進したいと存じます。

十五年の歳月を思い起こせば、梅花流御詠歌との不思議な法縁に感無量の思いがいたします。

合掌

仏教豆知識

質問

法事は何のためにするのでしょうか？

答

法華経を勉強しておりますと、【あの世】というのは行く所ではないと思うようになりました。

私たちは仏の世界からこの人間娑婆世界に、「しっかり苦しいことや悲しいことを修行して帰っておいで」と送り出されているのです。

つまり【あの世】は行く所ではなく、この世での修行を終えて帰る所なのです。

だから亡くなった方を追慕する意味も勿論ありますが、法事をすることによってしっかり自分が仏道修行をさせていただくのです。

その修行功徳は亡くなった方へ回らし向ける追善供養となるのですが、根本は自分の仏道修行の為に修行させていただくことであります。

その自覚がないと、「なぜ逢ったこともない人の法事をせねばならんのか？」ということになります。